

1 研究構想

(1) 研究主題

今年度の研究主題を以下のように設定する。

令和3年度 研究主題 主体的・対話的で深い学びによる確かな学力の定着を目指した算数科の授業づくり ～資質・能力を育むための全員参加の「学び合い」を通して～

(2) 主題設定の理由

本校では、学校教育目標を「学びあい、思いあい、高めあいのできる児童の育成」とし、一人一人の児童の成長を願い、三愛（学びあい 思いあい 高めあい）を通して、確かな学力が身につく、豊かな心をもつ児童の育成を目指している。

昨年度から「主体的・対話的で深い学びによる確かな学力の定着を目指した算数科の授業づくり～資質・能力を育むための「学び合い」を通して～」を研究主題に掲げ、資質・能力を育む子供達の「学び合い」に焦点をあて、算数科を中心に研究を進めてきた。これまでに積み上げてきた基礎力アップのための取組と、学習集団づくりへ向けた取組をベースにして、さらに「学び合い」の中で、本校で育成すべき資質・能力を育成できる算数科の授業改善を行っていった。

	学びに向かう力、人間性等	思考力、判断力、表現力等	知識及び技能
本校で育成を目指す 資質・能力	協働性	課題解決力	コミュニケーションスキル
資質・能力の具体的 子供の姿 ↓ 算数科での具体的 子供の姿	仲間と共に自分たちで学びを創ろうとする。	既習を活用した自分や仲間の考えをもとに、問題を解決することができる。 ↓ 既習を活用した自分の考えや、仲間の考えをもとに、「 <u>数学的な見方・考え方</u> 」を働かせ、問題を解決することができる。	5つのスキルの意味を理解し活用することができる。 <活動の中で使いたい言葉> ①なぜなら ②でも ③たとえば ④つまり ⑤質問があります
子供に提示する 資質・能力	ワンチーム	コンボ！	I (アイ) あい5

昨年度、本校で育成する資質・能力をキャッチフレーズ化したものが上記の表である。成果として、学校全体に「主体的に課題を見つけ、みんなで解決していこう」という意識が高まり、みんなが分かる（できる）ために学び合う風土が育ってきた。また、「数学的な見方・考え方」の一覧表を活用して、校内授業研修を重ねたことで、授業のゴールで目指す子供の姿・引き出したい言葉を具体的にイメージすることができた。

学力の定着においても、単元末テストの結果から全校平均 85 点で、目標値を達成することができたと考える。（以下の表：各学年の正答率）

	目標値	1年	2年	3年	4年	5年	6年	全学年
算数 単元テストの平均正答率（1学期）	80	95	86	92	83	80	83	86
算数 単元テストの平均正答率（2学期）	80	95	87	87	85	77	81	85

しかし、昨年度の課題として以下の点が挙げられた。

①学力の定着において、学年差・個人差が見られる。

⇒昨年度は、コロナ感染症のため休校期間があり、復習時間を十分確保できなかった。例年1月にあった標準学力調査もなくなり、市や全国平均との比較による分析もできていない。単元末テストの分析により、学年・個人の課題を明確にしていく。

②児童アンケート（資質・能力）の結果から「資質・能力の向上についてクラスの皆はできているが、自分ではできていない」と思っている児童が多い。

⇒一部の児童ではなく、全ての児童の資質・能力を育むために、全体の場合、グループ、ペアでの効果的な話し合いの仕方について学び合い、授業の中で対話的な話し合いができるようにする。

③教員同士による授業評価表の結果から「授業の中で子供たちに価値づけたい数学的な見方・考え方を顕在化させるきっかけとなる発問」についての検証が不十分である。

⇒研究授業の在り方を改善していく。互いに授業を見合う中で、単元の「数学的な見方・考え方」を確認し、明らかになった課題について継続した授業改善に取り組む必要がある。

④ 中之町で作成した資質・能力表のあり方に課題がある。

⇒キャッチフレーズを使おうとしてはいるが、手段としてのキャッチフレーズが目的化している傾向がある。資質・能力を発揮した具体の姿をもう一度全職員で共有化し・子供とも共有化する。対話の質の向上を図り、自分たちの考えを出し合い、練り合って解決していく力を育む。

「集団の力と共に、個の力をどのように育んでいくか」という視点が必要である。そこで本年度は、「主体的・対話的で深い学びによる確かな学力の定着を目指した算数科の授業づくり」を研究主題に掲げ、全員が参加できる「学び合い」に焦点をあて、算数科を中心に研究を進めていく。

これまでに積み上げてきた基礎力アップのための取組と、学習集団づくりへ向けた取組をベースにした上で、「個別最適な学び」と「協働的な学び」という観点から学習指導の充実を図っていく。全員参加のためにどのような手立てや支援を行うかを具体的に考え、全員参加の「学び合い」の中で、本校で育成すべき資質・能力を育成できる算数科の授業改善を行っていく。

【今年度の取組について】

(3) 研究仮説

＜研究仮説＞

全員参加の「学び合い」を意識した算数科の授業を行うならば、本校で設定した資質・能力が一人一人に身に付き、その結果、確かな学力を定着させることができるであろう。

(4) 研究の柱

◎自ら考え学び合い，課題を解決する力（資質・能力）を育成する算数科の授業改善

- ① 「数学的な見方・考え方」を意識した授業づくりと全員参加の「学び合い」をするための手立て
 - ・ 効果的な ICT 活用と効果的な話し合い
 - ・ 「数学的な見方・考え方」を働かせる言葉を，授業の中で活用
 - ・ ノート指導とOPPAを活用した学びの自覚
- ② 資質・能力をキャッチフレーズにし，授業の中で価値づける。
 - ・ 「コミュニケーション力」「課題解決力」「協働性」が身に付いた児童の姿を具体化する。
 - ・ 授業観察による改善の視点の共有化

○研究を支える取組

【学級集団づくりへ向けた取組】

- ① 年間を通した学級・学習集団づくり研修・実施
- ② 学習環境調査（hyper QU）の活用

【基礎力アップ】

- ① 学力調査等の分析に基づく年間を通した取組
- ② 振り返りを大切にしたいノート指導
- ③ 計算力・基礎学力アップ
 - ・ チャレンジタイムで個に応じた学力補充
 - ・ 中之町算数検定の実施

(5) 検証の指標，及び達成目標

★検証の指標と目標を以下のように設定し，学期ごとに検証することとする。

検証の指標	検証の目標
①学力調査等の正答率	学力調査等の平均正答率 80%以上
②ポートフォリオ（子供の算数科における「資質・能力」に対する意識）	子供の意識調査の肯定的評価の割合 90%以上
③授業評価表（教員同士の評価）	研究内容が実施できていると答えた授業参観者の肯定的評価の割合 80%以上
④学習環境調査（hyper QU）の結果	満足群と不満足群にいる児童の割合とその変容

2 研究の柱の具体的な取組

(1) 本校で育成を目指す資質・能力

本校で育成すべき資質・能力「協働性」「課題解決力」「コミュニケーション力」は、全教育課程の中で育成していくものである。その資質・能力を授業の中で確実に発揮させていくためには、全教職員や児童自身はその資質・能力を具体的にイメージしていく必要がある。そのために、次の表のように具体の子どもの姿を設定した。また、子どもが、意識し活用しやすくするために、この3つの資質・能力をキャッチフレーズにした。

特に算数科では、「課題解決力」を発揮した子どもの姿を、「数学的な見方・考え方」を働かせながら既習を活用した自分や仲間の考えをもとに、問題を解決することができるとした。

<目指す姿>

三愛「学びあい 思いあい 高めあい」の意識を発揮できる子ども

	学びに向かう力、人間性等	思考力、判断力、表現力等	知識及び技能
本校で育成を目指す資質・能力	協働性	課題解決力	コミュニケーション力
資質・能力の具体の子どもの姿 ↓ 算数科での具体の子どもの姿	仲間と共に自分たちで学びを創ろうとする。	既習を活用した自分や仲間の考えをもとに、問題を解決することができる。 ↓ 既習を活用した自分の考えや、仲間の考えをもとに、「 <u>数学的な見方・考え方</u> 」を働かせ、問題を解決することができる。	5つのスキルの意味を理解し活用することができる。
子どもに提示する資質・能力	ワンチーム	コンボ!	I(アイ) あい5
算数科での合言葉の具体の姿 (こんな姿が見られたら、「合言葉」で価値つけていく!)	全員を巻き込んで課題を解決しようとしている。 ↓ 自分だけが分かるのではなく、分かっている友達に声をかけ考えさせ、全員が考えられる(分かる)ように努力する。 (例) ・ここまで分かる? ・どこが分からない? ※クラスのみみんなが分かるのがゴール。	①「I(アイ) あい5」を使って、友達の考えとつなげている。⇒練り合っている。 (正答や誤答も大切) ②(練り合った考えを基に,) 「 <u>数学的な見方・考え方</u> 」を働かせるための発問(焦点化させるための発問)をする(教師・子どもも) (例) 色々な意見 ⇒共通する考えは? ③導入からまとめまで言葉をつなげていき、課題(問い)を解決していく。	<活動の中で使いたい言葉> 「つ・き・で・た・な」 ①つまり ②ききたいことがあります(質問があります。○○ってどういうこと?…等) ③でも ④たとえば ⑤なぜなら 
資質・能力を育成するための授業の中での手立て	途中で説明がとまってしまう児童がいる場合もそこにつながるように意見を交流しあうようにする。	児童の言葉で数学的な見方・考え方につながる言葉を取り上げたり、板書したりする。 ※大事な発問を出し、焦点化すれば、まとめにたどり着く!	児童が互いに気付きをつなぎ合いながら交流するように仕組む。
授業の具体的なイメージ	「コンボ」がつながって、学級全体が「ワンチーム」!	発言をつなげて「コンボ」考えをつなげて「コンボ」	育成するために…「Iあい5」を使っていく。

※ 資質・能力を育成するために、いつでもどこでも誰でも常に行っていく。

先生たちだけではなく、子ども達も意識をして使っていく。

(2) 「数学的な見方・考え方」の内容，発問，児童の具体的な姿を考える

算数科の学習指導要領では、「数学的な見方・考え方を働かせ，数学的活動を通して数学的に考える資質・能力を育成する」ことを目標とした授業の実現が求められている。「数学的な見方・考え方」は，算数科の目標を実現するための前提として示された新たなキーワードである。算数科の目標は，全ての子どもを対象としているということから考えると，子どもたち全員が「数学的な見方・考え方」を働かせられるような算数科授業が求められる。

そのような授業をするためには，まずは教師が，その単元で働かせる数学的な見方・考え方が分かり，どんな教師の発問が数学的な見方・考え方を働かせる発問なのか，どんな子どもの発言が数学的な見方・考え方を働かせた発言なのかを知る必要がある。そうすることで，授業の中で，子どもの発言を価値づけることができ，最終的には，教師が発問しなくても，子どもたち自らが，本校で育成すべき資質・能力を発揮させながら，数学的な見方・考え方を働かせることができることが期待できる。

そこで，以下のように，「数学的な見方・考え方」を具体的に落とし，表に整理した。

①数学的な見方と数学的な考え方の整理

数学的な見方	数学的な考え方
<p>事象を数量や図形及びそれらの関係についての概念等に着眼して，その性質や本質を捉えること。</p> <p>→ 問題を解く時の“着眼点”</p>	<p>目的に応じて式，図，表，グラフ等を活用し，根拠を基に筋道立てて考え，問題解決の過程を振り返るなどして既習の知識及び技能等を関連付けながら統一的・発展的に考えること。</p> <p>→ 論理をまとめたり，高めたりすること</p>

②算数の内容に関係した働かせたい数学的な見方（代表的なもの）

数学的な見方	内容	指導のポイント	例
集合の考え (なかま分け)	考察の対象の集まりや，それに入らないものを明確にしたり，その集まりに入るかどうか条件を明確にしたりして捉える。	考察する集合を明確にするとともに，その集合に入らないものと比較させる。	<ul style="list-style-type: none"> ・なかまづくりとかず（10までのかず） ・正方形のなかま分け ・整数の性質
単位の考え (単位=基準になる量)	構成要素（単位）の大きさや関係に着目する。	例えば，比べるときには何を単位として考えようかを考えさせる。	<ul style="list-style-type: none"> ・10のまとまり ・1000のまとまり ・0.1のまとまり
関数的な考え ※直接的には「関数の考え」として4年生以上で指導される	何を決めれば何が決まるかという依存関係に着目した離，変数間の対応関係に着目したりする。	関数関係を見出していくとき，2つの変数の関係をどのように表現していったらよいか，適切な方法を工夫させる。	<ul style="list-style-type: none"> 1年：10の構成 2年：九九 3年：□を使った式
基本的性質の考え	基本法則や性質に着目する。	「どんな性質があったか」「どれが使えそうか」と考えさせる	<ul style="list-style-type: none"> ・乗除の性質 ・図形の性質
十進位取り記数法の考え	十進法の原理や，位取りの原理に基づいて捉える。	ある単位の大きさが10集まると，どのように表されるのか考えさせる。	<ul style="list-style-type: none"> ・10倍一位が1つ上がる ・整数は0～9までの10個の数字を組み合わせて表される
割合の考え	2つの数や量の関係について，基準量を1とし，その割合として捉える。	差の比べ方と割合の比べ方を比較させる。	ある数量と，その数量に対応（相当）する割合がわかれば，1（100%）に対応（相当）する数量は， (ある数量) ÷ (対応する割合) の商として求められる
概念的把握の考え (≒概算，見積もり)	ものや操作の方法を大づかみに捉えたり，その結果を用いたりしようとする。	結果や方法の見通しを立てたら，実際の結果と比較させる。	
統計的な考え (資料を分類整理し，その特徴を捉える)	資料の量に着目し，違いを差や比で捉えたり，資料の分布の様子に着目し，傾向や特徴を捉えたりする。	世の中の様々な事象にある「ばらつき」をまず認識し，データを集めることで傾向を考察できるようにする。	資料を分類整理し，その特徴を捉える

③算数の方法に関係した働かせたい数学的な考え方（代表的なもの）

数学的な考え方	内容	発問・指示（例）	児童の発言（例）	キーワード
式・図・表・グラフ等を活用	式について考える	事柄や関係を式に表したり、式を読もうとしたりする。 ○式に表してみよう。 ○どうしてこの式になったのかな？		式にしよう 式からよみると
	表現の仕方について考える	問題解決の中で、表やグラフ、数直線や線分図、面積図などの表現の仕方を選んだり、それらの表現を適切にみとったりしていこうとする。 ○どのような表し方があったかな？ ○その表し方をつかってみよう。		表、グラフ 線分図 数直線
根拠を基に筋道立てて考える	類推的に考える	既習の考え方などの事柄との類似性に着目し、問題を解決していく。 ○今まで学習したことで使えそうなことはないかな？ ○既習のことで、似たものはないかな？ ○それと同じようなことがいえないかな？ ○それと同じようにできないかな？	・前に学習した～を使って考えると…だ。 ・○○のときも～してできたので、この場合でも～するとできる。	前の学習と似ていて～ ちがいは
	帰納的に考える	個々の特殊な事例に基づいて、共通のきまりを見出し、問題を解決していく。 ○整理してみよう。 ○何が見えるかな？ ○全てに当てはまるきまりや考え方はないかな？ ○どんなきまりがありそう？	・これらの式から～ということが出来る。 ・～を当てはめて考えると、～になる。	きまり 同じ
	演繹的に考える	すでに分かっていることを基にして、いつでも正しいことを説明しようとする。 ○なぜかな？ ○～を使って理由を説明しよう。 ○どんなことが分かっているかな？ ○そこからどんなことがいえるかな？	・前は～だったのでこれも～だ。 ・前に習った～がもとになっている。 ・～だからできる。前に～は、～だと学習した。	わけ 図や式をつかって
統合的・発展的に考える	統合的に考える	異なる複数の事柄がある観点から捉え、それらの共通点を見出して一つのものとして捉えなおそうとする。 ○同じところ、違うところはないかな？ ○もっと簡単に考えられないかな？ ○もっとすっきりさせられないかな？ ○共通するところはないかな？ ○どう見たら同じといえるかな？	・～が同じなので、同じ仲間になる。 ・前に学習した～と同じだ。	同じ ちがいは
	発展的に考える	1つのことが得られても、さらによりよい方法を求めたり、これを基にして、より一般的な、より新しいものを発見していこうとしたりする。 ○問題条件や場面をかえてみるとどうなるかな？ ○よりよい方法を考えよう。 ○条件をかえてみよう。	・この考え方が、～だから簡単だ。 ・～すると、～だから速く求められる。	だったら もし～なら

【参考文献】

盛山隆雄他「数学的な見方・考え方を働かせる算数授業」（明治図書、2019）

全国算数授業研究会「子どもの数学的な見方・考え方が働く算数授業（東洋館出版、2019）

片桐重男「数学的な考え方の具体化と指導」（明治図書、2004）

三原市立三原小学校 平成31年度 研究の概要（2019）

(3) ポートフォリオの活用

児童に力をつけていくためには、児童自身が意識していくことがとても大切である。そこで、昨年度から、全学年でポートフォリオ (OPPA) を導入して、資質・能力を児童自身が意識し、育んでいくことができるようにした。

OPPA (One Page Portfolio Assessment 「一枚ポートフォリオ評価」) とは
 …子どもたちが一枚のシートに学習前・中・後の履歴を簡潔に記録していき、自己評価する方法のこと

- OPPA では、次のような効果が期待できる。
- ★子どもの認知構造が明らかになる。
 - ★子どもの変容を適切に見取ることができる。
 - ★子どもの資質・能力を育成できる。
 - ★子どものメタ認知を育成できる。
 - ★子ども自身が自分の成長を実感できる。
 - ★子どもの学ぶ意欲が高まる。
 - ★教師が子どもの学びを見取り、指導に生かせる。
 - ★教師の授業改善につながる。

『教育評価の本質を問う 一枚ポートフォリオ評価 OPPA-一枚の用紙の可能性』
 堀 哲夫(山梨大学名誉教授・名誉参与)

【本校でのポートフォリオ導入の目的】

1. 育てたい「資質・能力」を児童自身が意識をする。
2. 自分や集団の振り返りをし、より良い集団になるための解決法を児童自身が考える。
3. ポートフォリオに残すことで、自分の成長を実感することができ、自己肯定感へつながる。
4. 教師が子どもの学びを見取り、指導や授業改善につなげる。

算数を通して「三愛」集団になる！

合言葉	全員でこの姿を目指そう！
「I (アイ) あい5」	「I (アイ) あい5」を使って発表をしている。 ※「I (アイ) あい5」“つ・き・で・た・な” ①つまり②聞きたいことがあります③でも④たとえば⑤なぜなら
コンボ!	「I (アイ) あい5」を使って、友だちの考えと自分の考えを つなげている。
ワンチーム	自分だけが分かるのではなく、 クラス全員が「分かった!!!」 になるように、 みんなを巻き込んで 課題を解決しようとする。 例) ここまではいいですか? 分からないところはどこですか?

※自分だけができるのではなく、クラス全員ができているかも振り返る



自分(自分たち)と向き合い、算数の授業を通してみんなですらに成長できる集団(クラス)になる!!

5月	自分	クラス	振り返り(何ができたか、さらに成長するために次何をがんばるか)
「I (アイ) あい5」			
コンボ!			
ワンチーム			

4月	自分	クラス	振り返り(何ができたか、さらに成長するために次何をがんばるか)
「I (アイ) あい5」			
コンボ!			
ワンチーム			

6月	自分	クラス	振り返り(何ができたか、さらに成長するために次何をがんばるか)
「I (アイ) あい5」			
コンボ!			
ワンチーム			

() 年 () 組 () 番 ()

3 研究を支える取組

【基礎力アップの取組】

○ 振り返りを大切にしたいノート指導

(ノート指導の意義)

本校では、ノート指導の意義を以下のように捉える。

「子どもにとって」

- 学習の理解が深まり、学習内容の定着につながる。
- 自分の考えが整理され、学び合いにつながる。
- 学習を振り返り、自己の変容を見取ることができる。
- 仲間との学び合いのよさを実感できる。
- 復習時の参考書やその後の学習を進める上での資料として活用できる。

「教師にとって」

- 子どもの学習状況を把握でき、個に応じた学習指導ができる。
- 自分の授業の反省ができる。
- 子どもとの良好な人間関係の構築に役立てることができる。

○ 統一したノートモデル

こんな算数のノートにしよう

- ① 月日、ページ、番号
- ② 課題とまとめは赤で囲む
- ③ 問題と問題の間を空ける
- ④ ものさしを使う
- ⑤ マスや罫線に合わせる
- ⑥ 自分の考えや考えの足跡(理由)を書く
- ⑦ 仲間の考えや、仲間との関わりの中で分かったことを書く

- (か) (課) … 学習課題
- (も) (問) … 学習問題
- (じ) (自) … 自分の考え(絵、図、表、式など)
- (み) (集) … みんなの考え 気づき
- (ま) (ま) … 1時間のまとめ
- (れ) (練) … 適用問題
- (ふ) (振) … 振り返り
- (低) (高)

見開き1ページに書く。

これらの意義を踏まえた上で、本校では図2のような算数ノートをめざす。

① 1マス目に縦に直線を引く。日付・単元名

② 文章題の問題文にした線を引く
 ・分かっている数…直線
 ・大切な言葉(キーワード)…囲む
 ・問われていること…波線

③ 課題設定
 問題提示の後、本時の目標に迫るための課題を書き、赤線で囲む。

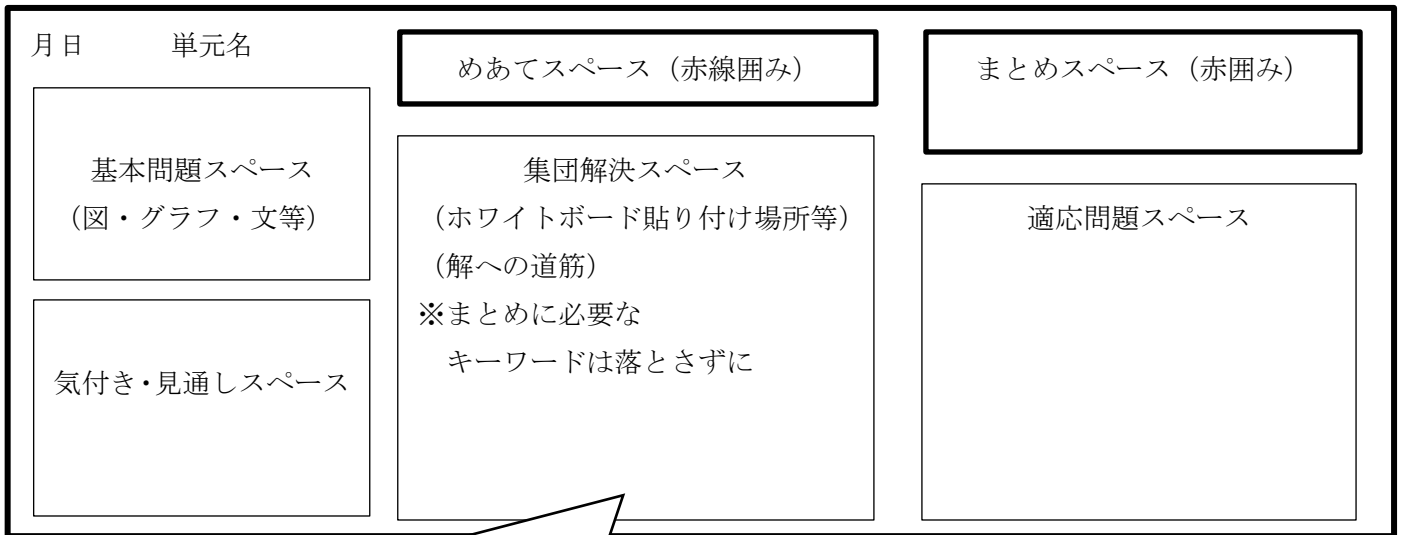
④ まとめ
 本時の課題に対する答え・結論を赤線で囲む。

⑤ 振り返り
 学習の方法の気づき、自己の変容を認識、次時への課題

ノートの書き方を統一し、教職員全員でベクトルを揃え、指導していく。

図2 めざす算数ノート

板書の統一化（基本形）



あくまでも基本形です。学級実態やその授業の特性に応じて、臨機応変に板書は行っていきましょう。常に子供の視線を意識して板書計画を立てることが大切です。その授業のねらい、目指す子供の姿を明確にした上で、板書に示すキーワードを具体化しておきましょう。

（3） 「中之町ふりかえりの視点」を活用した振り返り

振り返りについては、「まとめ」と「振り返り」の違いを以下のように捉えてその指導を行う。

<まとめ>

本時の課題に対する答え・結論。つまり学習内容に気付かせるもの。

<まとめの方法>

解決された内容を再生して確認したり、習熟の機会を設けたりしながら、内容を定着させる。そして、今日の授業で何ができたり身についたりしたかを明確にする。

1. 学習のまとめは必ず全員が共有する
2. 子どもの言葉でまとめる（書く）こと（教科書と同じまとめや教師の言葉でない）
3. 課題とまとめは、問いと答えの関係（整合性を図ること）
 - ・わかったこと（知識・理解）
 - ・できるようになったこと（技能）

<振り返り>

学習の方法に気付かせるもの。また、学びの成果を実感させ、自己の変容に気付かせるもの。

<振り返りの方法>

変容を捉える視点を明確に示し、数学的な見方・考え方のよさや自分の成長、仲間との「学び合い」の中での成長を自覚させたりする。自分の言葉で表現させることにより、教師が子どもの変容を確かに捉えたり、子どもに学びの自覚を促したりすることができる。次時への意欲づけも合わせて行っていく。

上記の意義を踏まえ、学校全体で振り返りを大切にしたいノート指導を行うことで、「今日は何を学んだのか？何を考えたのか？」といった本時のねらいを子ども自身が理解できるようにしていく。また、「中之町ふりかえりの視点」（作成予定）をもとに振り返りを書く指導をしたり、指導したノートを形成的評価として活用したりすることで、継続的な実態把握やさらなる授業改善へとつなげていく。また、最後まで書き終えたノートは担任が保管しておく。そして、各学期の終了時に自分のノートを評価する活動に取り組むことで、自分の成長や課題に気づくことができるようにする。

【振り返りを行うことでねらう効果】

- ・ 学びの良さを味わえる。
- ・ 協働的に学ぶことで、自分の良さやみんなができることの素晴らしさを味わえる。
- ・ 自らの学び方を評価できる。(メタ評価)
- ・ 次時への意欲を高めることができる。

【指導の留意点】

- ・ 振り返りの視点としては、

「分かった道筋」「もっと考えたいこと」「自分の変容・成長」「友達の考えの良さへの気づき」「勉強の良さ」「生活に活かしたいことや単元のゴールへの展望」等

- ・ 単なる「楽しかった」等の感情的な部分ではなく、「学習内容に関わること」「生徒指導の三機能に関わること(自己決定・共感的人間関係・自己存在感)」について振り返るようにしたい。
- ・ 授業時間内に振り返りを書く時間がしっかり保証できるように、授業の時間配分を意識して授業を組み立てる。

(4) 計算力・基礎学力アップ

① チャレンジタイムで個に応じた学力補充

今年度も10分間のチャレンジタイムを設定することで、指導時間を確保し、児童一人一人の学力補充を確実に実施する。

② 中之町算数検定の活用

【計算力・基礎学力向上に向けての実施計画】

四則計算を中心に数の構成や図形の求積公式等の算数固有の知識・技能は反復学習によってその定着度が高まる可能性がある。算数が苦手な子どもは積み上げてきた内容が少ないため、

ホップ・ステップ・ジャンプで計算力・基礎学力アップ!	
4～7月 ホップ	☆計算力アップ期間☆ チャレンジタイムや学力補充の中で、個に応じた指導を徹底 第1回算数検定を実施し、全員満点を目指す
9～12月 ステップ	☆フォローアップ徹底期間☆ チャレンジタイムや学力補充の中で、個に応じた指導を徹底 第2回算数検定を実施し、全員満点を目指す
1～3月 ジャンプ	☆最終強化期間☆ チャレンジタイムや学力補充の中で、個に応じた指導を徹底 第3回算数検定を実施し、全員満点を目指す

学年が上がるにつれて苦手意識が高まる傾向にあると考える。そこで、昨年度作成した「中之町算数検定」を実施すると共に、期間ごとの目標を設定して個に応じた指導を徹底していくことで、計算力・基礎学力のアップをめざすこととする。

【学級集団づくりへ向けた取組】

(1) 年間を通した学級・学習集団づくり研修・実施

学習集団づくりの意義

自分たちで価値ある課題を見つけ、自分たちで本気で課題と向き合い、自分たちで課題の解決方法を考えて修正し、よりよい解決方法を創り上げ、次の課題を見つけていく。そんな学習集団の中でこそ、一人一人の力はさらに磨かれ、さらに高まっていくと考える。そこで、日々の学習のみならず生活全般の中で、以下の3つのことを意識して取り組むことで、醸成された学習集団を子どもと共につくっていくこととする。また、学習集団づくりに関する研修を行い、実践力を高める。

① めざす集団・めざす自分を明確にしていく!

⇒色々な場面で「〇〇な自分(集団)になるために、このように行動する」といった目標を意識して活動するようにする。 目的意識の高まり

② 目標に対する振り返りを行っていく!

⇒振り返る中で「何ができないのか、なぜできないのか、ではどうすればいいのか」といった自分と向き合う経験を積み重ねる。 課題意識の高まり

③ 話し合う時の思考の方法をきちんと指導していく!

⇒みんなの意見が出た後の比較の仕方やまとめ方などを、経験を通して身につけることができるようにする! 意見の質の高まり

(2) 学習環境調査「hyper QU」の活用

「hyper QU」とは・・・

早稲田大学・河村茂雄教授により作成された、児童の心理的な側面を、質問紙法を用いて調査し、その結果から児童理解を深めるもの。内容としては、学級満足度尺度、学校生活意欲尺度、ソーシャルスキル尺度から構成されている。

<目的>

- ・個と集団の課題を把握する。
- ・学習環境分析を活用し、児童が安心して学習を行うことができる環境の整備を行うとともに、学力の定着状況と学習環境を重ねた分析を通して、望ましい学習集団の形成を目指す。